





清氏陽辰  
字子明  
官不詳

古序 龍上  
りてこちり  
りのまをい  
論 此政を  
不  
と 莊子揚 故 不

古今長  
唯  
莊子 鷓鴣 道 遠  
の  
つ日 物 決 ち 龍 辰 かの 子 とも 鷓 鴣 と 保 と ぬ

年の津波に... 意小... 世...  
... 龍... 鷓... 鴣...  
... 保... ぬ...  
... 鷓... 鴣... 道... 遠...  
... つ日... 物... 決... ち... 龍... 辰... かの... 子... とも... 鷓... 鴣... と... 保... と... ぬ...

昭和十六年三月三日寄  
石澤介吉氏贈

二たさるる一かれに立止むせめあやふく日敷るまに作  
 中し日ありさるる人の心ありらるる日におまふ  
 入たるけみまはつけられぬすのをとするお嬢のまじり  
 るもあこのおぬ様をたはしおくす目にある家の  
 人おの始りさるる一おのりるるおのりるるおのりるる  
 乃まのまをたはめいおのりるるおのりるるおのりるる夜ふ  
 言能能志はふるたにたのりるるおのりるるおのりるる  
 以後しるるおのりるるおのりるる遠くおのりるる  
 神子二十里の外とやいひんちとておのりるるおのりるる  
 五州の月とておのりるるおのりるるおのりるるおのりるる  
 引こも西へけあむまの夜乃神れ名お乃志のめ月  
 爰をせたるおのりるるおのりるるおのりるる

白史  
二十里外百人か

は海の御子  
は神の御子  
は神の御子

場川百首  
すこのあひ水れ  
うのみひちん神  
乃後りてこころ  
いり

かけて行くおのりるるおのりるるおのりるる  
 志けあむさるるおのりるるおのりるるおのりるる  
 若狭を水れおのりるるおのりるるおのりるる  
 ぬむむて神の心おのりるるおのりるるおのりるる  
 井田のりるるおのりるるおのりるるおのりるる  
 作りておのりるるおのりるるおのりるるおのりるる  
 一人のおのりるるおのりるるおのりるるおのりるる  
 由て取出すおのりるるおのりるるおのりるるおのりるる  
 きいことりりにはや思ひるる

古今序か  
人の心とん  
夫下保時  
すこのあひ水れ  
うのみひちん神  
乃後りてこころ  
いり

人の心をみる人るといふ昔乃りて思ひ出るるまじりたれ方  
 に驚の山ゆりまむりけおのりるるおのりるるおのりるる

出たてたれ  
はたねの  
まをきせ

新古今御後  
のちかひ

桃源の他四の  
り

詩經井棠扇  
君伯ノ訖ラヤシ  
長

道祖民俗  
共工氏の子行遂  
遊故其死後以  
高祖 和名依倍  
乃高天

輪蓋全書云  
菅原子名相  
亮一名日守祖  
好遠遊流者  
以爲行神而祈  
福故祖道

後時達  
我祖の神  
秘人  
我祖の神  
秘人

玉葉集  
新古今御後  
のちかひ

是たね作りもつけし神と仰て態の山とまうとんすを流るる  
はたねの思ひをよせよ 故も思はずとて志のちれるもなり 故  
田社をうけしもとちんけりかたためしるる

新古今御後  
のちかひ  
君乃竹伐所作として竹本を植をせぬと云ふ人もやあはれ  
むの陰世のうらみとて思ふらん 故も思はずとて志のちれるもなり  
がひえんかひえんかひえん

延喜式神名帳奥州台取郡佐美郡神社

乳の海作りとかかきける神子  
思ひ出の娘たちのかみ針のあはれとほの神やねん  
まが岩沼にふちへつ花梅のねん海なる男とていふもよ  
がひい出の

ゆきとびや二木の針を武隈のあんなふふとてかき  
ちかく武隈の神のたふす初とてあんなふふとてかき  
あられかき神とてあんなふふとてかき

稲苗のうきしかりのちかひ  
故も思はずとて志のちれるもなり  
あはれ高川にたふすあえわさけん  
たちかひのちかひのちかひ



万葉集を初めに  
同様の書  
もあつたといふ

天皇の后をあらはるる所にのちあらまむ日本武女もあれ  
たしまけをとりいふもうりれうごまみのなる施まやも  
あつたあたま赤もあつたあまの白鳥おかりてあつたあま  
あまあつたあまのあつたあまのあつたあまのあつたあま  
あつたあまのあつたあまのあつたあまのあつたあまのあ  
つたあまのあつたあまのあつたあまのあつたあまのあ  
つたあまのあつたあまのあつたあまのあつたあまのあ  
つたあまのあつたあまのあつたあまのあつたあまのあ  
つたあまのあつたあまのあつたあまのあつたあまのあ  
つたあまのあつたあまのあつたあまのあつたあまのあ

古今  
万葉集を初めに  
同様の書  
もあつたといふ

すこきふ岩がたもなちたるかお根とてわの標おかりて  
花さけらるりてあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ

漢書王陽  
九州車  
ハセト

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
まのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ

はつたあまの  
あまのあまの  
あまのあまの

龜井松平  
御後權平  
これか  
まてん  
の柄  
お登  
る  
あふ

お伊達もそや御了ん后の... 亀井の権平とあつて...  
お伊達の御了ん后の... 亀井の権平とあつて...  
お伊達の御了ん后の... 亀井の権平とあつて...

お伊達の御了ん后の... 亀井の権平とあつて...  
お伊達の御了ん后の... 亀井の権平とあつて...  
お伊達の御了ん后の... 亀井の権平とあつて...

お伊達の御了ん后の...  
お伊達の御了ん后の...  
お伊達の御了ん后の...

お伊達の御了ん后の... 亀井の権平とあつて...  
お伊達の御了ん后の... 亀井の権平とあつて...  
お伊達の御了ん后の... 亀井の権平とあつて...

お伊達の御了ん后の...  
お伊達の御了ん后の...  
お伊達の御了ん后の...

お伊達の御了ん后の... 亀井の権平とあつて...  
お伊達の御了ん后の... 亀井の権平とあつて...  
お伊達の御了ん后の... 亀井の権平とあつて...

いよににあはれとてとらんわふ思ひ出さる

さう三つ川の上波ながるよとけ年をかり書きをさくせんよ  
そとりの思ひをかき遠くうらぬわあらん

舟とて車もまじり書きをよびし松とて乃園や若らん書きを  
送りふちいし舟車と書するをよを何とよひしとらわな渡り  
あへて友をさして幸ねらふ友つと信玄山神道し

昔もむ人の志のよ乃山松風ふたれぬ毛もあやとさち柳を  
友にらんり昔よりあはれうごさうてたれに今又のたけい  
しとてなまによきし友あねのわやふるまふ人のふおまの  
やするのぢりあんは津の山のまた古に人をあひあふはなれい  
古の友をそねむりし松をる松の山のよはるるてと  
あふけけらめて古物あるべき保一日は志かふあふ友

古今  
さう三つ川の上波  
ながるよとけ年を  
かり書きをさく  
せんよ

昔もむ人の志  
のよ乃山松風  
ふたれぬ毛も  
あやとさち柳を

昔よりあはれ  
うごさうてたれ  
に今又のたけい

むら遠くこあわの若く遠の羊頭あるのあはれとせあふ

なつこうむつりけさう將軍家の由田家あふらうりあふ

くつろくくえくあふあはれりきささののいとあはれい

あはれははれははれいあはれいあはれいあはれいあはれい

そ風をいあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

古くとのいひん人の由をうとていのかあ市をさくたあ

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

あつれあつれあつれあつれあつれあつれあつれあつれあつれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

古今  
さう三つ川の上波  
ながるよとけ年を  
かり書きをさく  
せんよ

昔もむ人の志

狼土  
オアキナ  
オサムシ





古今  
卯辰月古門の人  
小三郎ある松年  
をへそ又とちい  
ん

さうりり帳たれて神祇よくとまは松梅なるかざるは老松殿  
すも書物したる一葉辭とみも豊隆いひのちのすもすも  
たるりくはそりもあらん内陣のことほしをまて板よりせりめく  
こもむもまて居るぬらるこれまけたのであるい豊ま人の松年こ  
えりすはたるのちちやこ宮いひつるふこ百回西斗されとんた  
くこつこくまかると田舎おあらくもあははまもまきまの  
かりたるうかまにつかまじもなる年よりいそもてま  
山風むちりあふ花のぬきをこそとらりぬたなる向ま  
せの志やあつて二申柳とらも里まつくこあたるの福豊といふ  
可泊津の祝者をうわたも堂あやまら洋まなる室も古門のふ  
二申ある松年を云とてんもせあうら  
古門の松年と神ととらり二申柳ふ又とてんも二申松年

拾遺 ちのめ  
あはれ家のま  
子息とられり  
かかるとまか  
ま盛

未木をーのち  
とらるはいむ  
してかまらり  
ま盛のね

いふふの思塚にゆつたはいひのふ出岩のやうなるのあはまの  
あはまもむけは松のすむくはあはまもむけはあはまの  
世の中の人らふ鬼こりて唯思塚に名のこりて  
あ達のまらそことかあはまもむけはあはまの  
下は松年いんはあはまひやう麻友や  
紅葉すもあはまのあはまもむけはあはまの  
神中松梅のいひとらりてあはまもむけはあはまの  
下は松年いんはあはまひやう麻友や  
あはまのいひとらりてあはまもむけはあはまの  
あはまのいひとらりてあはまもむけはあはまの  
あはまのいひとらりてあはまもむけはあはまの  
あはまのいひとらりてあはまもむけはあはまの

詞詠  
雄劍離照  
秋霜三尺  
自氏文集  
化作路傍士

玉衣を脱ぎたる兵ども刀のあんな限はうりやうとがむらの中  
耳のふし戸を原のちうひちじすて水助をかせしり河津の  
かくこし船舟さのりて世にあそびありあんり一隊に遠つたや  
あり 君へのぬいさきよいのれに従ひまじし雲の身なきけち  
しおもよりぬい今世まそと名をかくし言雲の巻麒麟とか  
りふさふのてふぬふ秋をぬいさふれはあふらふひんかし  
かぎふいあし君と臣と風と潮の雨ふかを向ひひめて治めあひ  
らんたをよけさかちあつくま暖くふをみて別たしうるなを  
りる危なき物お助けのせうせうりさるるん返をくそれをさたり  
れ布とほしけりかあそふとせ

秋のまのちさめぬ岩をとらふ小蛇のまきまきかごとし  
化して雲傍の古ともり年々まきまきすそをひあんなもせあや

春野のあまのれは  
かたまりてあつこ  
のりよよとまき  
るく佐野

百五十年十六  
横山新所  
思山井之  
千吾金美  
をまきあつこ  
のり

多倉やしもや清香れ混作るあまのさかきり  
雨をとりく降うて夕の籠えまほし

あつこは海らの浪るあまのちかたれぬまあれさ  
山の井けらるやうてもらえり

まきまきてあまのぬい山にの井のれらあやもこ

日和の福原をらふやあつこ小皇のまけ塚あふしあ保を彼  
々の位よりてあそまきとをさるるあんなの

跡はあし小蛇のまきまきあつこ世のあまを神おのり

あつこ山原の日出あつこまきまきあつこあつこあつこあつこ  
あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ



万葉集  
昔くもか  
るもか  
しりまの  
くもか  
り

一 一とまひよるれは旅なる時をうり神や里れ神のまを  
様と見るとすく佐枝けうりなる神と看とあらうくになと  
日すゆむ

ちりある一本橋の園のふまきのり橋の若やと海  
及の能ぬくりかりそをふいれとそと舎をとり佐らん  
ほとほやう白川の園山とたさうつまぬふ本前と海  
あむつうまにひあを右のいくはくまをいあをれぬ谷の  
あまをとんやをけるをたさくさる小りらむじういん  
え次 橋小中をるらんちとれ若人の云匠らん驛強乃  
鈴の声夜山をるもんほとがるわやややむいあふ  
夜さる山乃むまやふ 鈴のいふるもまをいあふ  
さうするやと御先のね乃大まちつけをるやとや屋乃

侍がとありておそあさ<sup>あ</sup>はせぬふ西端のまをいんよたはけ  
らとそをすの園山とたすまを  
井のいんるもあそくもあまにのあに神とた言あふ  
あふるのいんるもあまのいんるの能白川のいんるもあま  
秘んるそあふらんほに打もあふまの若あま  
まやうあまあふの能風乃折るぬいんあれせむ  
そわの侍すむ白川や雲の能風今る神と  
さうひの明神と神の能言ま津渡の神を祭すいあふ  
中けあまのそりけらおれぬ神言るれかあむつ  
そのあまあれすいんあつるあふ神あま  
らんあふくありて侍わ抱け柳こふたてあまは西  
上人の清水流るそよあれあん神あふ  
かあをれ

山家集乃の巻の  
信水海を極みけ  
とてしこころを  
とてしこころを

一 ちりて抱りよ人の手わきらういと初飾のまむり二廟との  
一 けし脚せりきしおおけ柳のまゝおまん物おほきまてまこし  
かりかくちとせんいとんつみずしからる手いさうたていそんまをる  
おろし何て情をちりしこおほくちん

乃のふちりく柳のまゝの踏を歩くとまをれや  
芦野御場をこまをて湯のまじり里おほきぬまのまじり

ありまをていそんまをて湯のまじり里おほきぬまのまじり  
あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり

是より日光山をこまをて湯のまじり里おほきぬまのまじり  
あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり

あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり  
あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり

あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり  
あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり

あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり  
あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり

あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり  
あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり

あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり  
あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり

あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり  
あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり

あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり  
あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり

あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり  
あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり

あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり  
あまのまじりまをていそんまをて湯のまじり



將軍家の目見えの御座は御一々御つゝみも其もあはるるをれま  
一 陣玉をのほしををとりひく人かたよりあわまのあはれをよそと  
けしひやうをるふかけまはるるもいふれとがへすこのあひのら  
かきまゝ道ひらく法ををきくせあふ直りしこのせんわら  
たははらんかたあひのらまはるるひたせんはすりのあや

わらひるるはなまはるるはるるの園乃あをそとてはせん  
そのあひのらまはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
るんごのらまはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
あはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる

たははるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
わらひるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる

はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる

一 衆とて若き若き花あはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
筑波山ますりをと道一花輪のあひのらまはるるはるるはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる

はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる

愛おまき若き若きとて人のすのたのたのたのたのたのたのたのたの  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる









列子曰田家ノ部  
人ノ世行ヲ羨呼ビ  
日ニ當シテ憂ナリ  
トシテ居ルニタル  
イト心シラスアキ  
マシカト曰ク  
万葉白ニ茹  
シタル思ハル  
事也

こゝれがゆきかきしれいかにさあせりふせせり  
まゝ繩かききこち知るらんかこのいゝとあるせふい様ふ  
沢多この芥をうるいど好もれ日乾き何とて  
して 公小奉りけんむりれられたふ人のたぐひ  
も侍らんかし

安永六年四月十日

畑中ヲ志藤原盛雄記

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the name '畑中' (Hatanaka).*

いぢうはきぬ志はしりて縁の具をわかし  
や殿おいでおれらんくおぼろおぼろ一縁のあつひるや  
おいらうほどに様々 公も入おはまはれもあつたなり  
おまはれをさし夫より二三日ゆりてたのなえかうことを  
そり出くももまたた。徒すをかさゆつむふ様ふな何  
あつたにゆつたのあつたもせは  
んあつむるもさしおぼろおぼろおぼろおぼろ

*Small handwritten marks and characters on the left side of the page.*

夜母懶懶

夜母懶懶

夜母懶懶

夜母懶懶

夜母懶懶

夜母懶懶